私は質問者が理解しているように、「歴史」とは絶えず書き換えられるものだと考える。ただ、ここで大切なことは「記憶」との対話だ。多くの場合、私たちは歴史がどういう視点から、どういう意図で作られ、書き換えられたかを知らされない。その時、歴史を検証する手がかりになるのが人々の「記憶」だと考えるからだ。

例えば、中国では中学校の歴史教科書から「文化大革命」に関する記述が大幅に削減されるという。約１億人に被害をもたらした出来事を後世に伝える必要がないと誰かが判断したのだ。これに対し、ネット上では「自らの子孫に真実を教えないなんて」といった批判が上がった。

これはまさに歴史を書き換えられている現場ではないのか。そして、それを批判する声は「記憶」に基づくものだ。人々が過去を忘れたり、人が亡くなって記憶を継承する人がいなくなれば、不都合な出来事は歴史から抹消されることになるかもしれない。歴史とはこのように意図的に作られてきたことを認識しておく必要がある。

では、「記憶」はどうか。継承は可能なのか。毎年８月６日、９日には広島・長崎で原爆慰霊の式典が開かれる。被爆者を高齢となり、その体験を現実に経験したこととして語ることができる人はどんどん減っている。

確かに、経験していないことを「記憶」として語るのは難しいだろう。しかし、次の世代の人々にも日々を生き、苦しい出来事を乗り越えてきた経験がある。その経験は未知の経験への共感となり、「記憶」の継承を可能にするのではないか。そうでなければ、私たちは歴史から教訓や知恵を学べなくなってしまう。

歴史は繰り返すという。しかし、悲惨な歴史や過酷な歴史は繰り返してほしくない。いま必要なのは、長い時間の中で埋もれてしまった「記憶」を掘り起こし、それを通して歴史を見つめ直す作業なのだと私は考える。